

## 17-1 授業解題

授業者：樋口 万太郎 先生

単元名：くらしをささえる「くらしとごみ」

授業タイトル：「放射性廃棄物について考えよう」

教科（領域）：社会科

対象：小学4年生

### 1. 【グローバル人材育成の観点からみた】本授業の「強み」

本授業は、現代グローバル社会における人類共通の課題としての放射性廃棄物の処理方法について、小学校4年生が全5時間にわたって学習活動に取り組むという社会科の授業である。その「強み」について、大きく2点ほど挙げておきたい。

まずは放射性廃棄物の処理という、小学校4年生の学習内容としては決して簡単ではない課題への取り組みを可能にするため、発達段階を適切に踏まえた学習活動が全5時間それぞれで適切に分節化され、実施されていた点をあげておきたい。本授業（単元）では、高レベル放射性廃棄物の存在やその処分方法について考え、議論するという高度な学習課題が設定されているが、そのためには、事柄についての基礎理解が少なからず要求される。

これについて、社会科の副読本だけではなくインターネット上の素材等が適切に提示されながら進む調べ学習が展開されていた点が、この授業の重要な基礎となっていた。

これを前提として、公開授業として実施された5時間目の意見交流において、各自の調べ学習に基づいた多様な意見が児童から引き出されていた点が、この授業の最大の強みである。児童が学習した核廃棄物の処分方法には、地層処分、海洋底処分、氷床処分、宇宙処分などがあり、児童は各自が支持する方法とその理由について交流したが、「処分地にすむ人の意見は？」「人間以外の生き物への影響は？」などといった高度な議論が子どもたちなりの表現で展開されていた。

総じて、人類共通のグローバルな課題としての廃棄物処理問題について、児童が主体的かつかなり質の高い形で「参加」していた点（またその参加の質を可能にした学習活動の組織）が本授業の強みである。

### 2. 授業のさらなるグローバル化に向けて

小学校4年生の授業としてはかなり充実した内容と言える本授業を踏まえて、次の課題としては、この学びを小学校高学年へとどのように繋いでいくかという点が考えられる。

例えば本授業の児童の発言からは、児童個人の利害から人類共通の利害へと思考が拡大していくさまが見て取れたが（「人間が生きていく上で一番害のないやり方は？」という発想）、逆に言えば、人間同士（国や地域）の利害対立等についての認識をよりリアルに深めていくことは、今後の課題であろう。これには、グローバル社会における対立する立場を

行き来するというより高度な思考が必要とされるが、本授業はそれに向けた学習活動の導入の側面を持つといえる。これを無理なく伸ばしていくことのできるカリキュラムの構想が次の課題になると考えられる。